

# 場所を表す前置詞句に基づく語形成

通時的な語形成と共時的な語形成

長野明子

## 1. はじめに

「語彙化」(lexicalization) という用語は、いくつかの異なる意味で用いられる(島村 2005)。文法化研究において、「語彙化」は通時的言語変化の一種であり、語でない単位の要素が次第に語という単位に変化することや、複合語や派生語が次第に意味的・構造的な合成性を失って単純語に近くなることをさす(Wischer 2000, Brinton and Traugott 2005)。一方、形態論と統語論のインターフェイス研究でいう「語彙化」は共時的な文法現象をさす。例えば、島村(2005)はいわゆる phrasal compounding の第一要素を「句の語彙化」の例であるとし、A→PP という書き換え規則が共時文法内に存在すると主張する。同様に、Di Sciullo and Williams (1987: ch.4) は、フランス語のいわゆる V-N compounds (例: *essui-glace* lit. wipe-windshield “windshield wiper”) を、N→VP という “a non-morphological word-creating rule” によって動詞句が語として再分析されたものとする。

本稿では、前置詞句(以下 PP)と関連する語形にもこの二種類の語彙化が関与していることを示すとともに、共時的な語彙化の概念を精緻化する。具体的には、次の下線部のような語形に注目し、(1a)タイプは PP の通時的な語彙化によるものであるのに対し、(1b)タイプは共時文法での形態論と統語論の競合の結果であると分析する。

- (1) a. a child asleep, fall asleep, go ashore.  
b. the under-tree planting, an off-map location, a major between class activities

なお、本稿では、前置詞の分析を含め、Baker (2003)の品詞論を採用する。それによると副詞は形容詞の一タイプであるので、以下では *a* が派生する(1a)のような語形を一括して「形容詞」とよぶ。

## 2. 接頭辞 *a* の現代英語での特性とその通時的発達

(1a)の語形を作る接頭辞 *a* は、現代英語の派生形態論の観点からすると非典型的な特徴をもつ。第一に、“in a state or position of”という(進行形の意味に似た)かなり機能的な意味、すなわち屈折接辞に近い意味を表す。次に、接頭辞であるにも関わらず基体の品詞を変える。具体的には、名詞、動詞、形容詞に付加して(叙述)形容詞を派生する接頭辞とされる(竝木 1985: 21-22)。この品詞特性は、竝木が挙げる *a* 以外の品詞を変える接頭辞 (*be-*, *en-*, *out-*, *de-*, *dis-*, *un-*) と比較しても特異的であり、*a* 以外のものは品詞を変える際には動詞を派生するが、*a* だけは形容詞を作り出す。また、派生される形容詞は統語的生起位置が制限され、名詞を修飾する際には(1a)の第一例のように名詞後位置にしか生起できない。最後に、*a* は現代英語では生産性はほとんどない。

*a* 形の語がこのような特徴を有するのは、接頭辞 *a* が、OE の前置詞 *on* の文法化に由来するものであることと強く関係する(Marcus 1998)。以下(2)の第一行目はこの文法化プロセスの概略である。

- (2) OE preposition *on* > *a* [ə] clitic > *a*-prefix > zero  
a. on see board a seaboard a-seaboard  
b. on the wrong a wrong awrong ‘wrongly’  
c. be/go on fire be/go a fire be/go a-fire  
d. be/go on hunting be/go a hunting be/go a-hunting be/go hunting

この通時変化を前置詞の補語まで含んだレベルで考えると、句(PP)から語(形容詞 A)への語彙化であるといえる。PP が語彙化すると A になるのは、そもそも PP が AP と同じ統語的布置を示すこと(Baker 2003: Appendix)の結果であると考えられる。すなわち、*a* 形の品詞と統語的布置は、PP の統語特性を継承した結果である。

OE 以来、*on* には [1] spatial PP を作る用法、[2] Manner PP を作る用法、[3] State/Process を表す構文(主に(i) *be*+PP もしくは(ii) *go* などの移動動詞+PP という型をとる)を作る用法がある。OED のデータを調べると、*on* PP のこの三大用法のそれぞれについて、(2a) (2b) (2c, d) で例示されるように、接語 *a* と接辞 *a* による対応用法が存在することがわかる。また、全体の形式が句から語へと縮小するほど文法化が進行しているということの証拠として、*on/a* の選択対象の種類が増えていくという事実がある。例えば、spatial PP 用法に基づく *a/a* は名詞にしか付加しないが、Manner 用法では、接語 *a* から接辞 *a* への推移の段階で、動詞とも結合できるようになる(例: *a-twitter*)。前置詞は動詞を選択しないので、これは、文法化の進行とともに選択対象が拡張していることを示す。同様に、State/Process 構文では、接語 *a* の段階で名詞だけでなく動詞も選択されるようになる(例: 1611 *To flourish, live in prosperitie, be al a flaunt, or a hoight* (OED))。(2d)のように *-ing* 形が選択される場合でも、前置詞の段階では、OE の純粋な名詞としての *-ing* 形の使用であるが、次第に *-ing* 形は動詞としての性格を増していき、最終的に進行形構文に合流する(中尾 1972: 260-261)。

観察をまとめたのが下表である。この表の波線部が、選択対象が拡張している部分である。この種の拡張は、英語史上品詞の形態的標示が失われたことに起因する類推的拡張であり、文法化における類推という認知操作の重要性を示している(瀬名・橋本・梅田 2006: 4章)(久米 2013 も参照)。また、(2)の文法化プロセスの最終地点は P 要素のゼロ化であるが、現代英語における接尾辞 a-の生産性の衰退自体を「ゼロ化」と捉え、文法化の最終地点と捉えることができるように思われる。ここで興味深い事実として、確かに on 由来の要素は用法[1][2][3]において最終的にゼロ化するが、それぞれの意味機能は、下表右端欄に示したような接尾辞や構文全体(進行形構文など)で代替標示されるようになる。特に[3]においては、on の機能が最終的に be + Ving という構文全体へ移譲されるといえるが、この事実は文法化と構文化の関連性(秋元・前田 2013)を支持するものであるといえよう。

|                   | on PP          | clitic a         | prefix a-        | “zero”                       |
|-------------------|----------------|------------------|------------------|------------------------------|
| [1] Location      | on NP          | a N(P)           | a-N              |                              |
| Direction         | on/to NP       | a N(P)           | a-N              | N-ward                       |
| [2] Manner        | on/in/of NP, A | a N(P), a A      | a-N, a-A, a-V    | N-wise, A-ly, Ving-ly        |
| [3] State/Process | on/in NP       | a N, a-V, a-Ving | a-N, a-V, a-Ving | be/go Ving, be on/in (the) N |

### 3. PP と相補分布を示す語形が存在

2節でみたのは、文法化によってできた a 形の語は、source となる on-PP と基本的に同じ統語的布置を維持し、on-PP の拡張としての選択特性をもつということである。通時の変化が「(元の形式の特徴の)部分的維持と部分的拡張」である限りにおいて、(1b)下線部の語形(以下 *under-tree* 類とよぶ)を、対応する PP からの通時的語彙化の結果とすることはできない。なぜなら、*under-tree* 類は PP が生起しえない環境、すなわち名詞前位置の環境でしか使えないからである。補部や付加詞をもつ AP は名詞前位置には生起できず(例: *a book full of pictures* vs. *\*a full of pictures book*)、Baker の PP 分析から予測される通り、PP も同じ布置特性を持つ(例: *a picture over the counter* vs. *\*an over-the-counter picture*)。この相補分布からして、*under-tree* 類は *under the tree* のような PP が「一語に固まった」ものではない。

本稿での提案として、*under-tree* 類修飾語と PP は、Cinque (2010)等で議論されている *direct modifier* と *indirect modifier* の交替関係であると考え(詳しくは Nagano 2013 参照)。*Direct modifier* は、X<sup>0</sup> レベルの非常に小さい統語構造と *non-intersective* で *generic* な意味解釈をもつ (Sadler and Arnold 1994, Baker 2003)。X<sup>0</sup> 要素という統語環境からの要請によって、PP がいわばラストラジゴーツ的に語の形をとって具現したもの、それが *under-tree* 類修飾語ということになる。これは、共時文法における句と語の交替関係である。

共時的な語彙化とは、Ackema and Neeleman (2004)の枠組みをとれば、「形態論が統語論に阻止されないケース」として捉えることができる。統語論と形態論が競合関係にあるとみるこの枠組みでは、英語では統語的な具現がデフォルトであって、それが使えないときに形態的な具現が使われる。この見方でいくと、*under-tree* 形は、ほとんどの環境では PP (*under the tree*) に阻止されるが、*direct modifier* の環境では句形が生起できないので生き残れることになる。A→PP といった書き換え規則を文法に用意しておかなくとも、*under-tree* 類に見られる句と語の共時的交替関係は、統語論と形態論の文法内での関係性の結果として説明できるのである。

### 4. 参考文献

- Ackema, P. and Neeleman, A. (2004) *Beyond morphology*, Oxford UP. / 秋元実治・前田満(2013)『文法化と構文化』ひつじ書房./ Baker, M. (2003) *Lexical categories*, Cambridge UP./ Brinton, L. J. and Tarugott, E.C.(2005) *Lexicalization and language change*, Cambridge UP./ Cinque, G. (2010) *The syntax of adjectives*, MIT Press./ Di Sciullo, A. M. and Williams, E. (1987) *On the definition of word*, MIT Press./ 久米祐介(2013)「Have/take an N 構文について」*JELS* 30, 118-124./Marcus, M. (1998) “A-adjectives (*asleep* etc.) in postnominal position,” *Explorations in Corpus Linguistics*, ed. by A. Renouf, 135-146, Rodopi./ Nagano, A. (2013) “Morphology of direct modification,” *English Linguistics* 30:1, 111-150. / 中尾俊夫 (1972)『英語史 II』大修館書店./ 竝木崇康 (1985)『語形成』大修館書店./ Sadler, L. and Arnold, D.J. (1994) “Prenominal adjectives and the phrasal/lexical distinction,” *Journal of Linguistics* 30, 187-226./ 瀬名秀明・橋本敬・梅田聡(2006)『境界知のダイナミズム』岩波書店./ 島村礼子(2005)「句の語彙化について—英語の名詞前位修飾表現を中心に—」『現代形態論の潮流』大石強ら(編), 55-73, くろしお出版./ Wischer, I. (2000) “Grammaticalization versus lexicalization: ‘Methinks’ there is some confusion,” *Pathways of change*, ed. by O. Fischer et al., 355-370, John Benjamins.